

広島俳句倶楽部

令和二年八月作品集

向日葵

ちどり

二〇一九年十月二十二日星月夜、長女に赤子が産まれました。私の初孫です。
共働きをしながらの、私の四人の子育ては、あつという間で、とにかく一生懸命でした。
久しぶりの赤子の誕生は、何よりの喜びでした。今回は、ゆつたりと赤子に接し、成長を楽しもうと思います。

星月夜大きな赤子生まれたる
乳飲子を蒲団にそつと寝かせけり
赤ん坊父に抱かれて鬼やらひ
すやすやと眠る赤んぼ雛の前
湯上りの裸の赤子寝返りす
短夜の二階の部屋に赤子泣く
夏の朝赤子ぐいぐい乳を吸ふ
夏座敷奥へ奥へと赤子這ふ
赤んぼの粥にトマトを刻みたる
向日葵や柵をつかんで赤子立つ

蓮の咲く朝を雲の渡りけり

蟬の声強くなりゆく水辺かな

大川の兩岸の蟬強きかな

涼風は二本の松に至りけり

本堂へ行くには通る茂かな

夏の蝶行きも帰りも出会ひけり

夏の本に囲まれてゐる静けさよ

木斛の花散ればくる夕べかな

また一人橋にかかりて蟬しぐれ

合歡の花過ぎるたび山遠くなる

佐保光俊

塀越しに百日紅咲く家並かな

波の音聞きつつ眠る夏の夜

蟬時雨の中の八時十五分

さつきまで芙蓉を揺らす風止みぬ

月のなき夜に匂へり秋の潮

秋暁の天心にある火星かな

秋の朝金星の下明け始む

昼の虫湯殿に風を通しをり

山間の湯の町に見る天の川

微睡みの底で聞きる鉦叩

村上正人

潮騒の届く畠に芋を植う

山水の流るる音や夜半の夏

一閃のすぐに落雷裏の山

大花火酒酌み交はす指照らす

大潮のうねりを照らし夏の月

かなかなや家族写真を撮り終へて

庭に聞き厨に聞いて鉦叩

虫すだく友への手紙書いてをり

鳴飛んで蓮の大葉を揺らしたる

夕暮の座敷に来たる鬼やんま

あざみ

足太し土用三郎さぶろの男の子

青梅雨のピアノを拭きて用ちるたり
 鮮やかな黄色の笠の梅雨きのこ
 梅雨きのこ素焼の鈴に生えてをり
 保育園へひまはり持ちて行く子かな
 卒業のアルバムめくる夏の夜
 自転車に止まつてゐたる夏燕
 大いなる真白きテント夏の月
 秋近しふらりと入る古本屋
 8月のパイプオルガン鳴り響く

亜矢

新緑や川端龍子展を出づ

兩岸の木の枝浸かり梅雨出水
 リハビリの自転車を漕ぐ梅雨の晴
 青山椒の佃煮つくる一日かな
 はうたるに赤子おどろき泣き出しぬ
 黒揚羽山椒の木より飛び立てり
 門柱に雀来てゐる夏水仙
 手を伸ばし一つ挽きたる青櫛
 忍のころを少女の摘んで卓に挿す
 待ち望む朝顔一つ咲きにけり

敬子

向日葵に波音とどく駅に立つ

朝の日のまだやはらかき蟬の殻
 何代も峽に暮らして百日紅
 ぶんぶんの群がる雨後の櫟かな
 朝驟雨けふ立秋と思ひけり
 山水の聞こえてゐたる墓参かな
 夕霧の近づく本戸を閉ざしたる
 真夜に覚め虫の声聞く生家かな
 早稲の香や雨脚すでに遠のきて
 刻々と露の晴れゆく稲田かな

暁子

初蟬に朝の日差の強くなり

百日紅静かに雨の降りだしぬ

蚊遣香母住む家のあちこちに

うたた寝の覚めて静かな夏の夜

頂に立てば夏霧昇りくる

山頂の霧に真白き花揺るる

蛸は林の雨の止みてより

よき声の蛸がまづ鳴きにけり

水を増す小滝にしばし休みたる

耳澄ませ虫の初音を聞きにけり

高尾ひとみ

雨の中にはかに過り夏燕

川面から大杉へ飛ぶ螢かな

令歎の花運動場の静かなり

九十の父藤椅子で雑誌読む

夏草や母の家にはまだ遠し

石垣を上るがごとく蛇の衣

小流れに枝ごと紫蘇を洗ひをり

傘さして大きな胡瓜挽ぎにけり

京に住む娘茄子漬買うて来る

石垣にじつと動かぬ蛸かな

ちどり

緋目高の小さな尾鰭よく動く

この枝のここに今年も萌つくる

夏の夜子は学校のこと話し

百日紅空に蕾の高々と

新しきブラウスを着て星涼し

夏の夕遠忌に人の集ひたる

雷雨きて茶店に走る城下町

灯籠の流るる川を見つめたり

蛸に母を思うてゐたりけり

宵の口しばし聞き入る虫の声

松本恵和

梔子の蔵の横から匂ひくる

金雀枝の莢の向うを日の昇り

梅雨明けの浜に自転車並びたる

縁側に蚊遣火を置き父厳し

外灯が夾竹桃を照らしたる

花擬宝珠景を抜き出でて茎伸ばす

白南風やクレーン船の音響き

店先のハイビスカスに朝日さす

時計草となりとの塀上りをり

炎天や鉄塔の光曲がりさう

美耶

空缶のペン玉にはふ溽暑かな

梅雨茸の白極めたる大きな

干し竿に雨粒ならぶ梅雨さなか

海風の強きを飛んで夏の蝶

夏山に安芸の小富士を見下ろしぬ

草くぐり早瀬の音の涼しさよ

茗荷の子三つ摘みたる匂かな

縁台にお隣も居て蚊遣焚く

鰯飛んで工場の影揺れにけり

大橋博子

夏の朝となりの子ども泣いてをり

七月の夜の川舟のつながれて

白南風や屋敷の門の開きあり

白南風や海の匂のふいにせり

夏の夜の河口に浮かぶ小舟かな

百日紅咲く家の角まがりゆく

夏深し開け放ちたる御堂かな

大店の暖簾に夕立降りかかる

翻訳の小説を読み夜の秋

桑門わかこ

はうたるは終えて降りすぐそこに
雨続き胡瓜とてつもなく太る
大水車回つてゐるたる梅雨の晴
へディングの練習をする夏の朝
翌朝も椅子に掛かりて夏帽子
金魚つり子はいくたびも蚊に刺され
風の死す土佐の街道歩きけり
枝豆を取りて見舞に届けたる
棚経にチームのシャツの子の座る

新庄憲彦

七夕の五分で終わる電話かな
超新星爆発もなく星月夜
遠雷や昨日の置き傘の行方
面談の封筒に置くビール缶
空蟬は道路横断する気配
スコールが始まるそれぞれのベランダ
朝焼けは東西和洋色の山
アクリルに入れて海月を空に見る
海松太し客船の波とうに過ぎ

ふじ女

洋館の門扉の先のクレマチス
さくらんぼ言葉少なき夫と居て
一株を見臺の植うる百日草
凌霄の映つてゐるたる水たまり
雨雲の下がりて浮巢霞みたる
窓開きわつと飛び込む蟬の声
医学部のメタセコイアの蟬の穴
夏の雲傷いて大樹に風が吹く
湯上りの匂ひする子と庭花火

松田裕子

枇杷の木の低きへ母は袋掛け
片蔭を押し行く母の車椅子
白日傘鳥居に置いて参拝す
浜へ出る近道行けば夏蓬

外回り終へて拭へる背ナの汗
アスファルト匂うてきたる夕立あと
バス停に風の吹きけり夕立あと
枝豆の盛られてゐたる通夜の席
鰯飛んでまた月光を受けにけり

森口良樹

夏場所の力士にエール地酒酌む
野地蔵へ野牡丹を摘み供へけり
兄弟と昼餉の後の瓜を食ふ

遠雷に怒りの消えて眠りけり
寺の朝厨煙らせ茄子を焼く
清盛の戦せし島揚花火
朝顔の紺の初花雨上り
墓囲む盆灯籠の白きかな

阿姫

青柿やキャッチボールをする親子
砂浜に突き刺さりたる夕立かな
空蟬のしがみついたる松の枝

病室に星飛ぶ空を見上げけり
退院のすこし反り身に秋涼し
秋の昼腕を捲りて採血す
点滴のぼとぼと落つる秋暑かな
好物の缶ビール供ふ迎へ盆

友岡崇山子

幾筋も舗道を這ひて蒼青し

スマホして日傘の人の通りたる

区役所の森閑として令歎の花

退院の母を囲みて土用丑

われ先に筏へ泳ぐ子どもかな

父さんを砂で埋める水着の子

大川をのぞむ座敷に鮎を食ふ

草取を終へて畑の土を見る

岩魚つくところへハリス一投す

鈴が鳴り張る道系に月の差す

祖父となり祖父を偲びて彼岸花

待ちわびて月は東に出てにけり

恐ろしや満月冴えて迫りくる

飾り付け物語となる菊人形

梅雨晴のアガパンサスの青と白

故郷の校歌に浜木綿のありて

山の道薄桃色の令歎咲いて

夏の土佐岬を廻り帰る里

古里の山の中なる盃蘭盆会

通勤の車の前とぶ秋茜

鳳仙花幼き指に弾けたる

井藤希

英一

大畑恵

長梅雨の明けて今宵の星の数

梅雨明けの折り目正しくたたむ傘

亡き母へ切る白百合の第一花

子の居らぬ砂場に草や蟬しぐれ

単線の川のほとりの合歡の花

隣より貰ふ枝豆根っこ付き

枝豆の緑うつくし茶碗蒸し

白神陽子

朝な夕なトマトの熟れを見つめたる

庭園に蟬の声のみ聞こえたる

凌霄の雫をつけて落ちにけり

島泊り蝦蛸の大盛どんと出る

枝豆を強く押し出し味はひぬ

食卓にトマトの色の映ゆるなり

夕暮の一輪残る赤き薔薇

宮田保江

向日葵や仮設住居の軒に沿ひ

一番にトマト頬張る朝餉かな

通院を終へて籠れる炎暑かな

見上げたるトートムボール蟻の列

夏の蝶飛び去るまでは筆を置き

畑や二人の母の遺影拭く

栄吉

夜の明けて月下美人の滴せり

白靴のきちんと揃へ脱いであり

甘酒を美味しと啜る夕間暮れ

黙禱の間の一層の蟬しぐれ

仏間よりただよふ桃の香りかな

新涼の本渡れ日あたる石仏

穂高

いつまでも目高見つめていた私

万緑の中で遊びたる子供達

さつぱりとそうめん食べて夏の月

夏の夕病んだ体で一句かな

夏の空弁当開けて妻思ふ

阿波久

氣に入りし柄の金魚を買ひにけり

日盛の駐車場から砂利きしむ

裏庭に咲いて綻るる烏瓜

夏曉のしぐまの音を聞いてをり

弟よ盆灯籠に囲まれて

紀英子

だしぬけに海辺に花火上りたる

墓参して母に聞きたる祖父のこと

新涼や旅の計画始めたる

峠越え蜩の鳴く村に入る

撫子

夕風の街廻り行くループバス

送り盆伯父伯母の名の懐かしく

新涼の物干し竿にシャツを干す

遠藤さつき

青柿の小動物に食はれたり

鬼やんま小屋に入つて来りけり

線香の香りの残る墓参り

かこ

自転車を止めて鶺鴒見てをりぬ

早朝の聞き慣れぬ声渡り鳥

爽やかな朝の目覚めの水を飲む

上島康子

帰らぬと座り込む子や油蟬

片蔭のポストに手紙投函す

炎天や橋の下流に鷺を見て

熊谷ゆり子

拭うてもほとばしる汗廊下拭く

窓伽桶に水を満たして盆参り

空青し盆柿の赤鮮やかに

民

グラントの泡立つほどの大夕立

蟬の骸ころがつてゐる土熱し

新涼の机に本を並べをり

ちかこ

遅生りの茄子の花咲くプランター

竹藪を通る風音秋涼し

新涼の深呼吸する朝かな

みさ子

喜雨の音包丁の音してゐたり

爽やかに山へ向かひて窓ひらく

秋風や電車の窓の開かれて

やす保

墓参り眼下に見ゆる三角州

朝顔の描かれてゐたる盆灯籠

無花果の甘みのなきはジャムにして

山崎桂子

八月の尽きし新聞来たりけり

衣かつぎ夫とふたりの会話かな

津田玲子